



東北復興 PSW にゆうす

2021（令和）3年2月13日、宮城県、福島県で震度6強の地震が発生し各地に被害をもたらしました。東日本大震災から10年経過しましたが、災害は過去のものでなく、今、そして、常に身近で発生する可能性のあることを改めて実感いたしました。これからは東北復興PSWにゆうすを通じて、東北の今を、そして委員会の取り組みを発信していきます。今号では、49号、50号に続き、全国大会・学術集會会場での物販に商品をご提供いただく予定だった岩手県の事業所からのメッセージ、そして、本協会田村会長からの寄稿文を掲載させていただきます。

（東日本大震災復興支援委員会一同）

東日本大震災より10年経過して(1) ～岩手県の事業所の皆様からのメッセージ

社会福祉法人燦々会 あすなるホーム 西條 一恵

陸前高田市で障がいがある方々の就労支援をしているあすなるホームです。

日本精神保健福祉士協会様には、震災後、私どもの菓子等を何度も販売していただき、誠に感謝しております。毎年、全国の各所に送るので、利用者のテンションも上がり、「〇〇知っているよ」「行ってみたいな」などと話が弾みます。

震災後、施設の被害は少なかったのですが、インフラが回復してからも販売先がなく菓子製造ができなくなったり、地域の企業が被災したので作業依頼が来なくなったりして利用者への作業提供が難しい時期もありました。そんな折、全国から支援に来ていた方々がそれぞれの地域に戻ってから、イベント等での販売の注文や受託作業提案を受け、菓子を作り続けながら新しい作業にも挑戦してきました。

現在は、菓子以外の商品も増え、訪問販売も再開して毎週出かけています。色々な受託作業に挑戦し、利用者にあわないものは止め、現在は、5種類ほどの作業に取り組んでいます。陸前高田駅の横にある「まちの縁側」という気仙杉の香る建物の中で「はびなるカフェ」を昨年2月にオープンしました。この間、休業の時期やテイクアウトのみにしたりましたが、感染症予防対策を取りながら1周年を迎えることができました。記念イベントはできませんが、手作りの商品をプレゼントしながらお客様をお迎えしています。「北限のゆず研究会」の会員にもなっていることから、ゆず関連の商品(菓子類はもちろん、ゆず塩やゆず麺等)もあります。新商品は、地元広田湾の海水で利用者が作業した「すじあおのり」と、利用者が1針ずつ丁寧に作った「福をよぶはぴちゃん」ストラップです。ホームページをご覧くださいありがとうございます。

利用者の特性に合った作業、そして工賃向上につながる作業をこれからも模索し続けていきたいと思えます。いつかまた、お立ち寄りください。



社会福祉法人大洋会 星雲工房 戸羽 幸枝

こんにちは。星雲工房です。東日本大震災から10年目を迎えます。当時、10年後はなんと遠い先か、と思ったことを思い出します。

星雲工房の利用者は主に大船渡市、陸前高田市の方々です。街の様子は1年ごとの変化が大きく、新しいお店や施設、道路がどんどん出来ているように感じます。星雲工房自体は山の上であり、時々、窓から見える松の木にはリスがいるようなところです。あれから変わらずお菓子を作っていて、種類もまた増えました。今の時期はいちご大福がおすすです。全国大会の物販では続けてお世話になり、おかげさまで看板商品のみそぱんは、ますます自信をもって作っていかうと思えるようになりましたし、取引先も少しずつ増えています。受託作業については、このコロナ禍で厳しい状況でしたが、そのようななか、水産関係からのお仕事のお声がかかり、わかめの抜き作業をみんなで行っています。1年もするとみんな上手になり手つきが違います。最近ではホヤのお仕事も施設外で行っています。震災を経て、また、このコロナ禍で思うことは、全国の構成員の皆様もご自身の立ち場で頑張っておられるということです。また、大変な時にかけていただき、親切、思いやりというのは身にしみて有難いものです。改めて日本精神保健福祉士協会の皆様へこれまでのご支援に感謝しあげます

これからも星雲工房はおいしいお菓子を作りながら、職員も利用者も人に優しく、少しでも地域の力になれるように頑張っていきたいと思えます。



社会福祉法人大洋会就労継続支援B型事業所「朋友館」は岩手県大船渡市にごさいます。就労支援事業ではクリーニング作業や食パン・菓子パンの製造を中心に、軽作業の請負や昔懐かしい米どん菓子の製造に、現在41名の方が日々作業に取り組まれております。

特に米どん菓子の製造では、原材料は米のみでなく、くるみやアーモンドも加工しています。また、手ごろなサイズにカットした米おこしなどには、東日本大震災の被災地の商品を購入したいとのお声をいただき、全国各地から多くの注文をいただきました。10年の歳月が流れ、様々な地域で豪雨や地震などの災害により不自由な生活を余儀なくされている方が少なくないなか、日本精神保健福祉士協会構成員の皆様には、いつも気に留めていただいておりますことに感謝する毎日です。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、地域のイベントの中止や縮小に伴う販売機会の減少など、東北の私たちの日常にも大きく影響を及ぼしていますが、またいつの日か懐かしの味と感謝の気持ちを届けられるよう、日々今できることに力を尽くしていきたいと思ひます。

今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



東日本大震災より10年経過して(2) ～日本精神保健福祉士協会会長メッセージ～

感謝～被災地で出会ったひとたちへ



(公社)日本精神保健福祉士協会 会長 田村 綾子

2020年は、東京オリンピック・パラリンピックの開催が予定された年でした。2011年に東京都が立候補した際「3.11」から月日が経っていませんでしたので、こんな時になぜ…と感じました。津波被害や原発事故のあった福島が東京方面に電力を供給していることに、都民としてのうれしめたさもありました。ところが、当時の福島県精神保健福祉士協会の会長が「ぜひやって欲しい。復興の希望になる」と優しい目を輝かせておっしゃるのを聞き、胸がいっぱいになったことを覚えています。

2011年のゴールデンウィークには、福島県協会役員の方たちと会津地方へ避難者の聴き取りに行きました。当時検討中だった福島県での全国大会開催について希望を失いかけていたのですが、鶴ヶ城を見上げて、「必ず全国大会をやろう」と言われたお二人の力強い声に込められた思いは、私にもずっしりと届きました。

その年の夏、本協会の被災地支援ボランティアで福島県南相馬市に赴きました。拠点だった原町保健センターの保健師さんとは今も年賀状のやり取りを続けています。避難所で親族を亡くされましたが、放射線被害を避けて屋内にばかりいる地域の子どもの発育を心配し、日々訪問に出向かれる姿には使命感がみなぎっていました。翌年には家を新築したと知らせてくださり、前を向いて生きておられる力強さを感じました。

宮城県は被災県でありながら、本協会の活動拠点として数々の事業実施に県協会としてご協力いただいています。東北6県の支部長を主要メンバーに発足した復興支援委員会は、当初から仙台市で開かれ、出席するたび街中に活気が戻っていくのを感じられて復興の足音を実感できる機会でした。この委員会の取組であるほっとミーティングでは、岩手県陸前高田市の方たちと膝を突き合わせて深夜まで語り合いました。翌朝、土地の造成のために砂利を積んだ大型トラックばかりが往来する広大な沿岸部を走り、津波にさらわれてしまっ何もない景色のなかで語り部の話を聞きました。高田松原の奇跡の一本松を見たときには自然の厳しさとともに、それに耐え抜くいのちの逞しさに感動しました。

2011年3月11日、私も大きな揺れに怯えた一人です。実質的な被害はなくとも希望を失いかけてました。でも、自然災害を避けることはできなくとも、つながりや絆を力に変えられることを学びました。あれから10年間、ここに書き切れるはずのない多くの出会いに勇気をいただきました。ただただ感謝です。



【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会ウェブサイトにてご紹介させていただきます(原則として投稿者氏名以外の個人情報掲載いたしません)。投稿方法はFAXもしくはE-mail:office@japsw.or.jpにてお願ひいたします。

★題名に「PSWにゆうすについて」とご記入をお願ひいたします。★

第51号 2021年3月15日発行

編集：公益社団法人日本精神保健福祉士協会 東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町23-3 四谷オーキッドビル7F TEL.03-5366-3152 FAX.03-5366-2993

★URL: <http://www.japsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <http://www.japsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>

